



七言古詩

畫本金花談序



夫治國出術者舉用賢才而仕出

然其君不明而失其舉用則反至

喪其國家自古亂臣賊士奮國殺



君者多親幸權貴出士也是其初

據國君失其舉用及振其威專其

明遠
第969
卷

權雖香忠臣無如出何耳故舉用
出際可不慎與假令香究奸佞惡
出心處卑疏出地屈小吏出職矣
雖由此欲逞其邪欲不可得也吁知
人難非知人也難用出實難凡爲人
君者與學而可乎學而不明其德
善惡邪正何以分辯張若朱紫不
相亂君子小人分辯則於治國家
何者頃閱小說金花談記一國侯
逆臣執國柄專威權作喪亂出夏
巨細曲說如置耳目於其地親見
聞也固小說家出言雖不足信概

能讀者鑒也。為霞轍也。戒於修身。
治國也。祈豈鮮少乎哉。及請其序。
為題卷端爾。

西洲散人撰

丁巳不為一物狂
其時日月亦為
一物時其明





彌智迺胙肱也信

市方常斜志冥響哥

南鄙久新東響雲然

家

新古今

賴朝卿



繪本金花談惣目録

第一之卷

名城兵庫頭奸計の事

名城鬼柳小卒の事

才助勘解由の事

名山樵妻の圖

才助の事

其二其三

才助の事

岩城の事

奸臣の事

第二之卷

繪本金花談惣目録

友衛青樓小登り事 并 高園松代源と事 同圖

る園園後床代輝と事 并 玄宗皇帝の事

傾城る糸後床代輝する圖

楊子紀代馬冠事と事

名城才系と事 友衛代護と事 并 糸再後床と事

名城才系友衛代輝する圖

友衛る園と事 并 糸再後床と事 同圖

并 名城才系と事 友衛代護と事

糸再後床と事

名城才系友衛代輝する圖

糸再後床と事

第三之卷

友衛園松川と事 并 糸再後床と事

糸再後床と事 其二 其三

伽羅下結の圖

友衛る園と事 并 糸再後床と事

糸再後床と事

友衛る園と事 并 糸再後床と事

糸再後床と事

友衛る園と事 并 糸再後床と事

糸再後床と事

友衛る園と事 并 糸再後床と事

才四之卷

花系貞治言純好意幽友衡半

岩城兵庫竊運意瓜若る目

法士源金と純訓る圖

友衡隱居能ひの半

五國の法士衣裏の門火す獲とふ圖 其二

友衡隱居の圖 其二

友衡隱居番代十渡の半

大祥定和因が義言法士の耳目代替る圖

番代祥儀市川後河義言の半

友十代家勢相續の半

才五之卷

松並的と助半 弄的之助淺番源金とふ半

的之助食菜蠶の圖

昭谷常力の助代紙るの圖

大場宗易毒菜調進の半

浅毒毒菜代紙と半 弄的之助毒菜吟味後

秋御昭於友十代君圖 的之助擔人傷協澤の圖

岩城多摩河野勢守代針半 弄才永奸針の半

毒菜物落致後見而士純老圖 毒死の尸骸見るの目

才六之卷

才永勘解由岩城と決候の理代説半 同圖

岩城之庫蔵母小助氏得事

菅野小助氏と交て竊ひ入る圖 其二

松並的之助及野小助氏殺し事 同圖

的之助雪夜に天降る退る圖 其二

松並的之助衆難事

獲明院壇所難く加持氏殺し事

岩城才左衛門的之助氏隔るんとする圖

岩城的之助が石を罵る圖

第七之卷

伊勢守仁德取捌の事 并 岩城才論乃事

岩城去庫蔵的之助氏罵る圖

槍皮作番近奥殿の屋根氏奪得る圖

的之助荒井和助氏捕る事

松並的之助竊に幼君氏を獲るとる圖

荒井和助寢殿に老ひ入る圖 松並荒井氏捕る圖 其二

服谷帶刀刺客氏捕るとする事

帶刀夢中其圖 伊勢忠次氏刺客氏捕るとる圖

第八之卷

河並三右衛門と交の事 并 服谷帶刀捕状乃事

河並三右衛門と交する氏竊る事

河並幸國と交り服谷才左衛門の圖 緒士澤定老圖

一帯刀家士捕状乃事

大に大昭を文廣え傳

伊賀澤田の両士大江君を捕ふ圖

帶刀孫金之出府の事

友衡卿書次廣澤に就て松ヶ崎より歸る圖

根谷軍刀偽書次投ふ圖

秋篠清八郎城越く中庭補に走る圖

第九之卷

於大政所邪正對決の事

第十之卷

孫金殿中問對の事

第十一之卷

岩城を庫裏被召取事

帶刀燒捨盟書

才原勘解由奸刺軍刀事

才原罪小伏を圖 才原附針根谷を安圖 其二

大に廣え仁惠柴名橋田を事代を捕ふ圖

才原人梶原氏の館を破る事

第十二之卷

行島双十郎星夜出孫金事

諸士評定の圖 諸士孫金へ送る圖

行島が智安を安んずる圖

岩城を庫裏父子脱罪の事

山本須田等が六士才原沢尻

行鳩密計擄才原兄弟事

才原兄弟斬中山降行鳩事

山本須田等の士才原が士不賄賂沢尻送る圖

関中中山討く降沢尻の圖

才原兄弟飛伏する圖

賞罰雙行関中平均の事

忠士に縁恩者へ沢尻賜ふて奥裏の圖

繪本金花談惣目録 終

繪本金花談卷之一

目録

岩城兵庫氏奸計の事

岩城鬼柳ふ平を成る図

才原初解ゆせむ事

岩城山抱裏の圖

才原辨之助が傳

其二

其三

才原知解は岩城兵庫頭と合併する事

岩城兵庫才原成子因

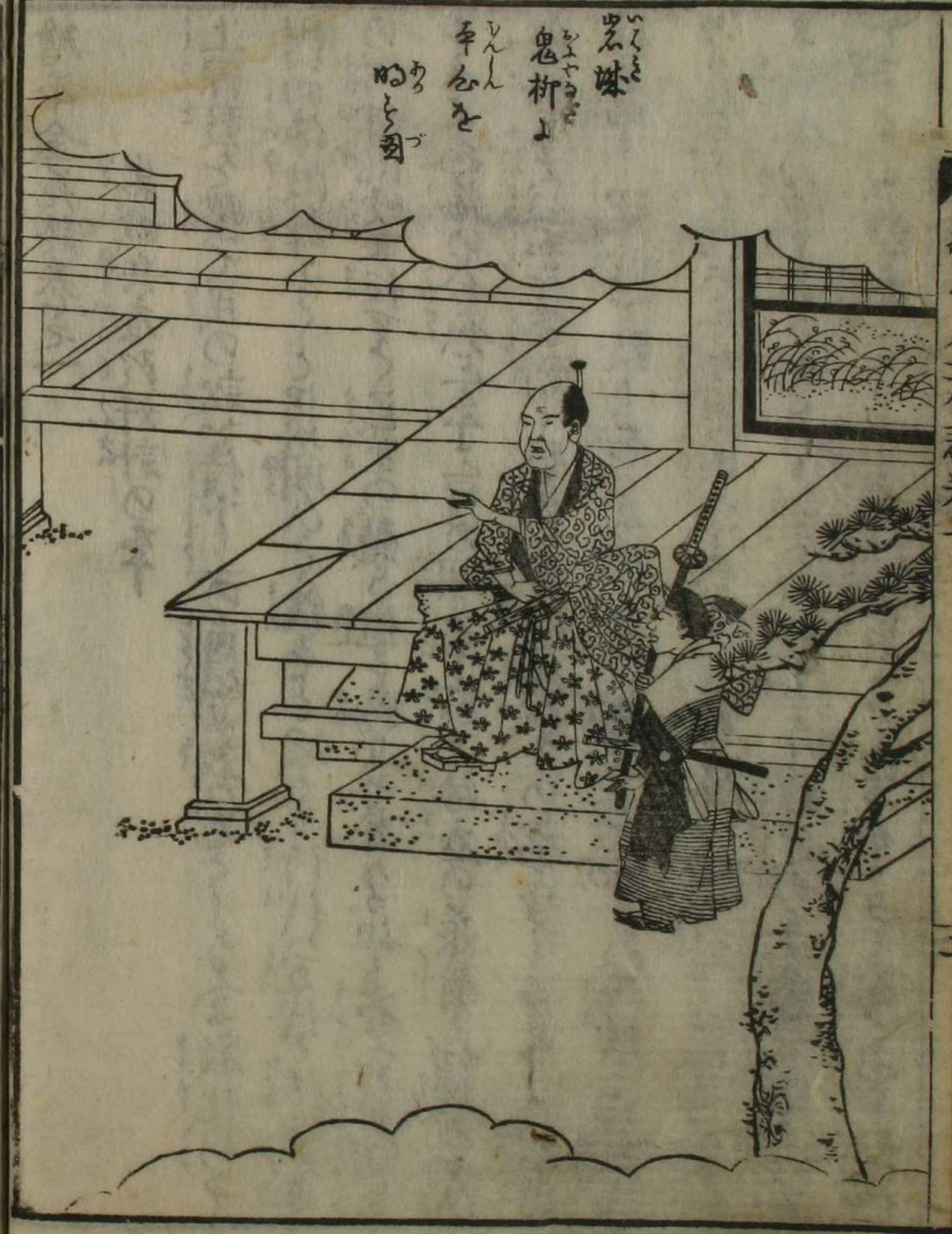
奸臣が御代邦治する事

壁に天代邦治する事

繪本金花談卷之一

岩城兵庫既奸計の事

上棟敷を繋て民の記と待下上の直致を致ひてさうさふ教化なり
 附四海波静なりとは天國ひく徳をさうさふも市代に万代と治る太平
 の時付風吹ふ保そく民衆の應に極を物もそ有る。ねも右大なる朝と
 そでみ海海の合戦三年二月の間み平家と海軍の原屑と切沈めひ
 隠倉み大波を策創し賢良良佐と撰び下の記と守りてさうさふ海に
 使ひし四民服と致し。ねもみ道ひ道ひ落るるを拾ふれ市代といはれ
 々。後ろみ文治五年陸奥國二十又那のまは連泰勝と伝ひのひ泰勝罪
 み伏して後ろみ友勝と伝ひ其のまは。保連那み味廓と傳ひ此の
 とちろり。ねもみ凱陣とて後國家へし。ねもみも固く。ねもみ代



鬼柳
 平公を
 めとす

鬼柳平公をめとす



岩の
遊
の
山



松泉
の
助
の
傳



會中
金
花
卷
一

會中
金
花
卷
一



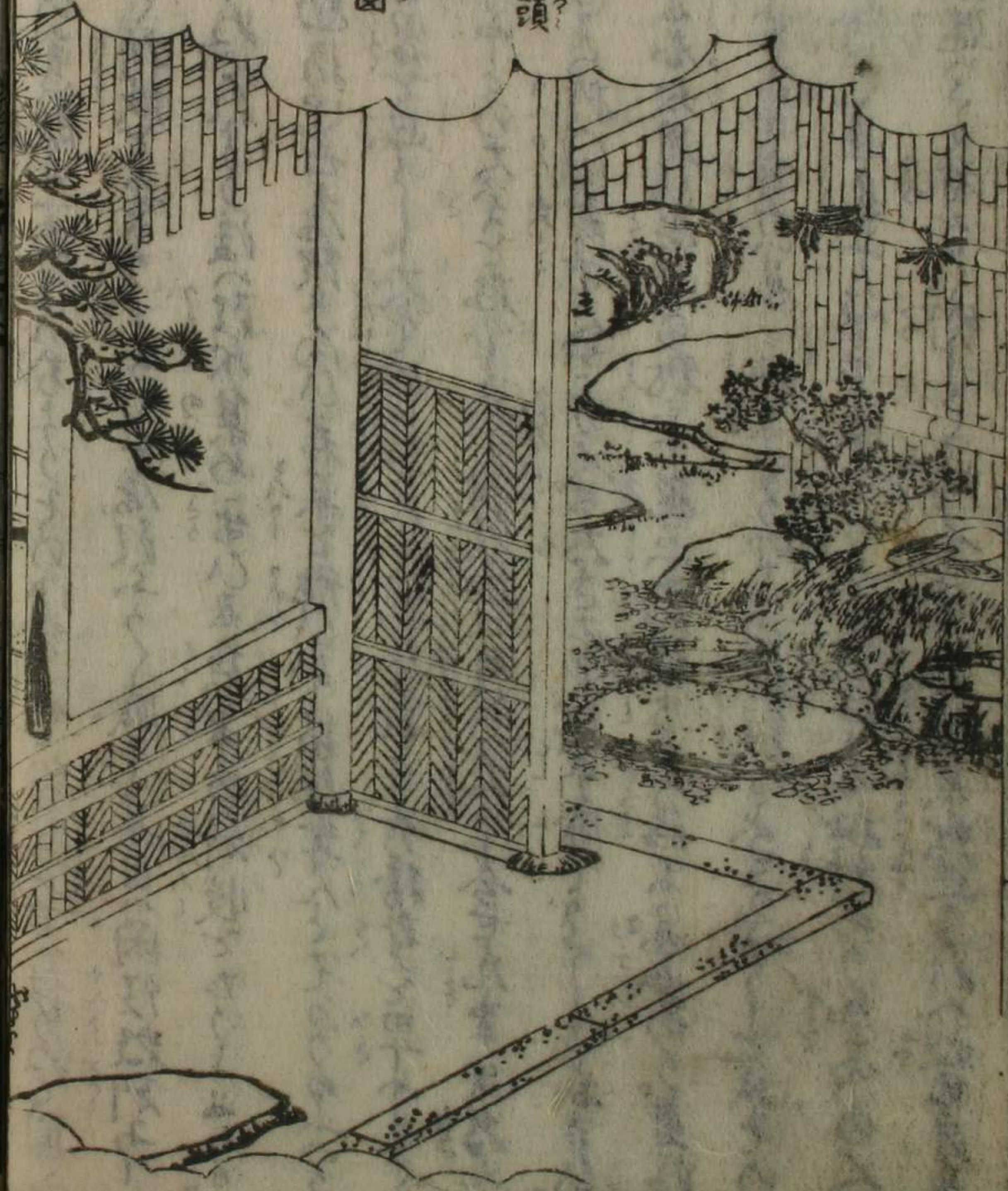
其三



一匹の白狼、腹は鼠に裂傷し、腸溢せ死す。世に各、助げ沈重
 大膽といふたが、却てうまを虐め、主を辱る。猛虎の獸、その腸をやううと
 金く、又の疾うのこを知らず、理なるうさ、此刀は民の父才、系内、獲へんがと
 當、中、真の復、秀、術、よう、術、う。牛王、若、老の業、物、く、民、初、こ、う、子、の
 至、事、又、在、と、教、び、家、僕、が、た、天、情、を、や、う、く、大、勢、を、二、法、を、以、て、強、め、ま、し、ん、
 各、助、と、驕、む、の、せ。こ、う、が、た、駭、と、人、ま、し、ん、掲、せ、疾、の、う、ち、を、ゆ、う、る、を、の、ち
 各、助、武、藝、と、い、ひ、も、力、を、又、強、く、一、國、を、さ、う、び、さ、く、は、其、所、術、を、能、
 練、す。死、活、の、法、拳、を、用、ゆ、る、事、鬼、神、不、思、議、の、業、め、り。智、略、勇、猛、諸、人、
 各、如、果、く、く、家、の、執、事、と、い、ふ、成、ふ、や、り。

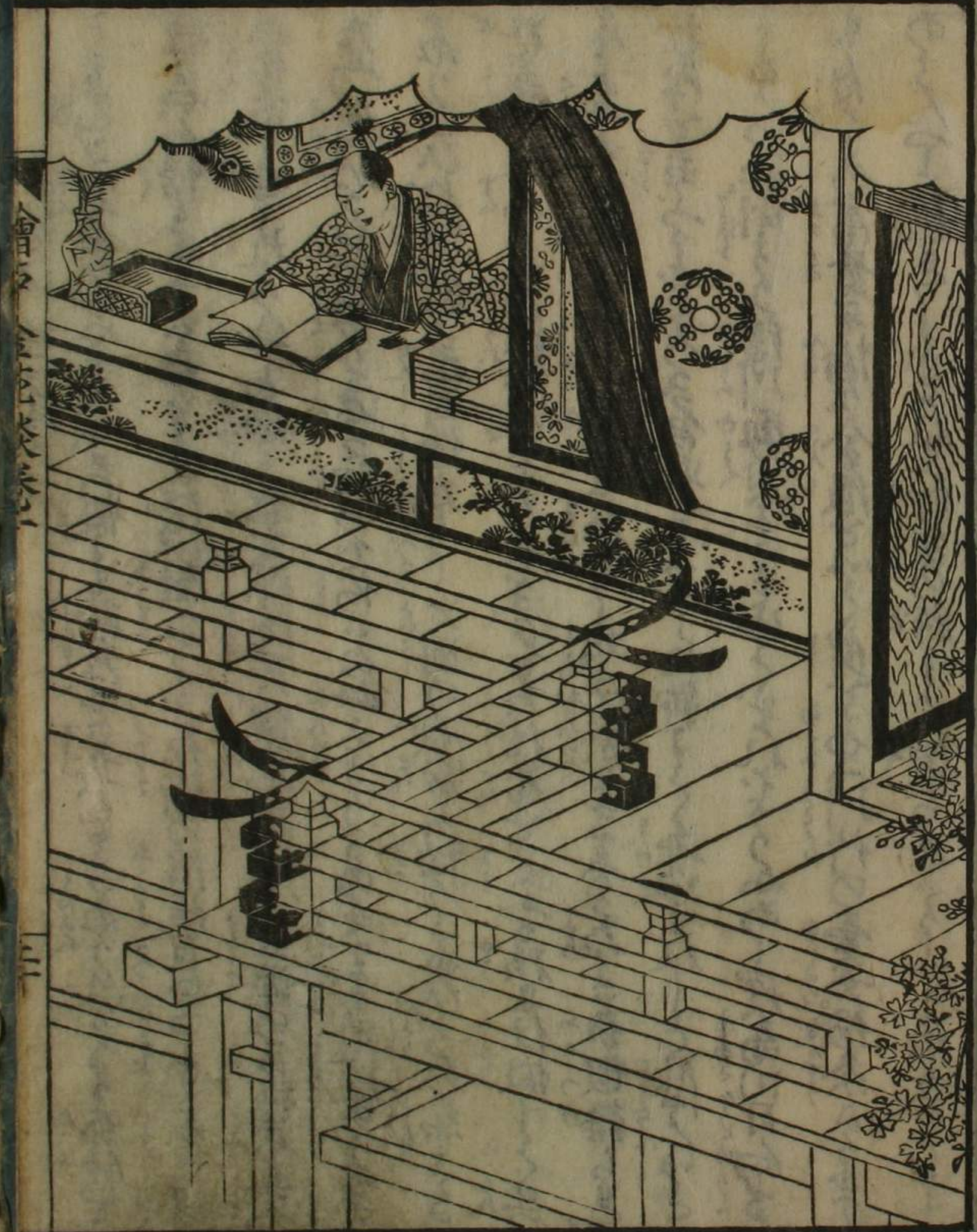


岩城
五庫頭
杉原と
誠園



取つていふやうな不便が、それと清く、また、おぼえを改め、教へる
下。こゝをゆく、権勢の金を方々より入らせし縁で、罪を重ね、次は家
族の及ぶ處に、主陸奥も友衛と毒害せん。友衛が實に伊達伊賀守
友衛ありとも、常時地へ、僅にすなわち、り。かゝる悪事を、
物の極み立ち、さといふが、智へ、僅に南ひ三方の友み代も立ち、
半疑ひなり。是をも付帯と伺ひ、毒業とやく交ひるが、名へ来ふ立
らんと事改せり。そとやくをせむ、毒害と改めたり。才系頭を振く
此中用ひて、あほど係争と二度用の時、事病状の標となるべし。
もと我れ其の甘酒家の大男の家臣あり。若し鑑倉よく主君友衛毒み
あつて卒せられりとば、たゞ服谷常刀片島惣十郎うともぐら
幼主守護と称して、鑑倉も出たり。益ね友み代が例も作りか

毒は用ひず事秘するの事さるに向後いふ事諒略もそのひささく
し。未だ計畧を任せあらざる速うく。本國老臣の事も眉を顰る
ひささ。玄厚院曰。事秘は但するの上の事とも宜敷計ひや。こ
う。それ汝の奇計は背く。才原曰。抑も余一つの腹をけん凡
人の心の動も易き事なり。高直友衡いす。二十歳に達す。高
直友衡を好む。酒色之道を避る。と。いふも。余近日友衡ふ。酒色を
度り導く。と。人物と見立例役。と。服従させ。頻りに松里の通ひ
とす。自らと魚りて導せ。將軍の上より達する。高直計する。俗
高直や。の事。持や。と。世の上の人。鉾の所持。放蕩の事。跡
世。上へ活と取沙汰する。時節。安君梶原氏のう。と。相違う。の。今。内。意
と。と。脱。友衡の。仍。状。上。の上。より。達。し。と。り。此。分。う。そ。七。名。滅。亡



會々々々々々々々々々



嬖臣君父
邪路小
尊圖

終々々々々々々々々々

[illegible]

日田を耕しつる時文を現つとも信ずるは家なる儒者の。
所國政の事ありは辭事ありとも信ずるは家なる儒者の。
所國政の事ありは辭事ありとも信ずるは家なる儒者の。
所國政の事ありは辭事ありとも信ずるは家なる儒者の。
所國政の事ありは辭事ありとも信ずるは家なる儒者の。
所國政の事ありは辭事ありとも信ずるは家なる儒者の。
所國政の事ありは辭事ありとも信ずるは家なる儒者の。
所國政の事ありは辭事ありとも信ずるは家なる儒者の。
所國政の事ありは辭事ありとも信ずるは家なる儒者の。
所國政の事ありは辭事ありとも信ずるは家なる儒者の。

争ひ強めこれに重なるは進めく邪路に墜しきと度殊々天地雲霧のお違
と謂づ。友部厚来孝名の君子母儀を承るゝあらうといふことと
そとをあらう。新き清き向ひて作るゝ平芳と柳夕夢とてひきす
母その安んじゝるゝあらう事承承らば何さぬ人其其辭あり。徳人のを
安んじゝるゝあらう事承承らば何さぬ人其其辭あり。徳人のを

繪本金花談卷一終

